

俊哉さんとの秘密の関係から、数日。

俺はもの凄く快適な日々を送っている。

まず、仕事中に突如襲う激しいエロ妄想がなくなった。トイレにいても、職場にいても、休憩室や給湯室に行っても浮かんてこない。

以前までは不意に込み上げる禁断の職場エッチ（激しめ）に囚われ、数分思考が完全に停止し、声を掛けられて現実に戻る状態だったのに。

ああ、心の健全化とはこんなにも素晴らしいものだったのか。

（割愛）

そうして家に帰って少ししてから着信があった。

驚いて見ると、画面には『佐伯』とある。

お風呂上がりで慌てたまま通話をスライドした俺は、色々と整わないままで心臓がドキドキしていた。

『ごめんね、こんな時間に。メッセージでもいいかと思ったんだけど、どうしてもかなと思って』

「あの、大丈夫です！」

慌てながらベッドに腰を下ろした俺の耳元で、佐伯部長……俊哉さんが楽しげに

笑った。それがもう、ムズムズする。

『本当に？ 何かしていたのかな？』

「いえ、その……お風呂を出た所だったので、慌ててしまつて」

『それはタイミングが悪かつたね。かけ直そうか？』

「いいえ！ あの、大丈夫、です」

本当はこの声を聞いていたからだつて……バレて、ないよな？

電話越しの俊哉さんは柔らかい感じのまま。でも、少し疲れているようにも思える。

そういえば、今日の昼はどうしたんだろう。他の人と昼食に行くことはあつても、女性には珍しいと思う。

『実は、昼にも助けてもらつたからお礼を言いたかつたのと、明日の予定を聞きたくてね』

「助け、ですか？」

何のことだかさっぱり分からない。

首を傾げる俺に、俊哉さんは少し疲れたように笑つた。

『実は、昼食の少し前に総務に用事があつて、書類を届けに行つただけだね。そこで対応してくれたのが彼女……江崎さんだったんだ。彼女は以前から少し積極的で、何度か仕事を理由に断つたりもしてしまつたから、今回は断り切れなくて』

「ああ……」

それは容易に想像が出来る。

当然だと思いが、俊哉さんはモテる。男性社員からも頼られているし、女性社員なんてかなり積極的な人もいる。

顔良し、高収入、部長という立場、独身、優しい。まさに好条件なんだろう。だからふと、気になった。

「あの、ご不快でしたら答えなくて構わないのですが」
『ん？』

「恋人を作られるつもりは、ないのですか？」

居てもおかしくはないけれど……居たら俺とあんな関係にはなっていないだろうな。とも思う。

これに、俊哉さんは苦笑した。

『そうだね……清一郎君だから言うけれど、私はゲイなんだよ』

「……はい」

その返答はまあ……そう、だよな。男の俺と性的な関係があるんだから。とはいえ、キスしかしていないけれど。

なおも、俊哉さんは困った様子で言う。

『恐怖症とか、そういう事はないんだけれどね。女性を心から愛する事はできない』

んだ。性的にもまったく反応しないしね』

「そう、なんですか」

『うん。だから迫られても困ってしまふんだよ。期待させたくはないけれど、酷い上司だと思われるのもね。だから今日は助かったよ。近くにいた相沢さんを巻き込んでしまったけれど、それでも居心地が悪くてね』

「お察します」

俺はまったくそういうものがないから、苦勞するな……としか思えなくて申し訳ない。

でもどこか……これを聞いて、ほっとしている自分も、いるのかもしれない。

『清一郎君は、どうなんだい？』

「え？」

不意に問われて、俺は何の事か分からなかった。その空気を察したのか、俊哉さんの声は少し低く……甘くなる。

『相沢さん、いい子そうだったから』

「相沢さん、ですか？」

確かに清楚で穏やかなタイプで、俺みたいな根暗真面目にも親切的な対応をしてくれたけれど……それだけ、なんだよな。

「そうですね。優しい人だと思います」

『そうだね』

「是非とも辛い事なく過ごされて、良い人と巡り会ってくれたらいいなと思います」

『……え？』

「？ 何か、おかしいですか？」

俺としては真面目に答えている。

彼女のような人は穏やかなまま、良い人と巡り会って結婚などして、優しいお母さんになつてもらいたいと思う。その素質はあると思うのだ。

けれど……電話越しの俊哉さんは笑ってしまった。

「あの」

『うん……ごめん。今のは私が意地悪だったね。お詫びに、明日は美味しい洋食の店で待ち合わせをしようか。くるだろ、清一郎君？』

「っ！」

その、甘く低く誘う声は反則です。

耳から犯されると言うのは、きつとこういう感じだ。声が脳を痺れさせ、体を疼かせる。そんな甘い誘惑に、俺が勝てるはずがない。

「是非」

『うん、良いお返事だね。詳細は明日、メッセージを送るよ』

「わかりました」

『おやすみ、清一郎君。よい夢を』

そう言つて、通話は切れた。

甘やかな声音が今もまだ耳に残っている。それに脳を揺すられながら、俺はベッドに倒れ込み呆然と天井を見上げた。

「今日、眠れないかもしれない」

明日は金曜日。仕事終わり、どんな夜になるのだろう。期待でちよつと心臓が痛くなる俺だった。